信州大学 SHINSHU UNIVERSITY | 教育学部 附属長野小学校

２年１組

今日もいっしょにすごそうね、アヒルのツムピー

ツムピーのうんち

手の平に乗るほど小さく黄色かったアヒル。毎朝アヒルを見る度に「先生、なんかまた大きくなってない？」「また白くなった気がする」「なんか鳴き方が、ピーピーだけじゃない。大人の鳴き方が入ってる気がする」と、あっという間に大きくなっていく様子に驚く日々です。そして、毎日子どもたちのアヒルへの思いに触れ、考えさせられる日々です。

アヒルが来て１ヵ月が経った頃、アヒルのうんちでいっぱいになった小屋を前に「うんちそうじの係を決めた方がいいのか、やりたい人がやればいいのか」という話になりました。話し合いの時間を作り、係を決めた場合と、決めなかった場合、それぞれの良さや欠点を出し合う中でＮさんが「え～、でもやっぱりうんちそうじはしたくない」と気持ちを届けてくれました。そこから、うんちそうじへの思いやアヒルを飼うことについてそれぞれが語り始めていきました。

Ｒさん：俺は無理やりやってるよ。だってさ、うんちそうじやらないとアヒル飼えないじゃん。逆にうんちそうじやらないとアヒル飼ってることにならないじゃん。
教　師：飼ってることにならないってどういうこと？
Ｒさん：アヒルを飼ってるって中に、うんちそうじとか、えさをあげるとか、おさんぽさせるとか入ってるから。だから僕はそういうかんじでうんちそうじやってる。
Ｋさん：おれもやりたくないけど、うんちそうじちゃんとやらないと津村さんが不安になっちゃうから。約束したから。
Ｙさん：私は本当はやりたくないけどさ、でもアヒルかわいそうだからやってあげたい。だってさ、臭いまんまだとさ、アヒルさん嫌がっちゃうし、アヒルさん自分のうんち食べちゃう。
Ｎさん：私はやりたくてやってるの。だって綺麗な方がさ、アヒルさんが気もちよくなって健康になれるほうがうれしいから。
教　師：じゃあ、やれる人がやればいいんじゃない？
Ｈさん：そしたら他の人は飼ってることにならなくなるよ。
Ｋさん：俺が思ったのは、うんちそうじやりたい人だけがやっちゃうと、他の人が飼ってることにならないからかわいそうだから、みんなもやった方がいいんじゃないって思う。
教　師：かわいそうって、誰が？
Ｋさん：うんちそうじやりたくなくてやらない人。飼ってないってことだから。
Ｔさん：あ、動物園の飼育員さんはうんちそうじするじゃん。でもお客さんはかわいいって見てるだけじゃん。だからうんちそうじしない人はお客さんと同じってこと。
Ｈさん：アヒルとお別れするのっていつだっけ？そのときにさ、うんちそうじしなかった人は、あ～うんちそうじしなかったなって思っちゃうんじゃない。

Ｔさん：次の生き物飼う時も、やりたいことしかやらない人になっちゃって、それじゃだめだと思う。

Ｄさん：そうそう、やりたくないことはやらなくていいんだって思う。

Ｒさん：あのさ、アヒルを飼うっていう大きな丸があって、その大きな丸の中に、うんちそうじとか、えさやりとかおさんぽとかあるんだよ。その大きな丸全部やるから、アヒルを飼う資格があるってわけ。だからうんちそうじもやんないといけないの。

教　師：でもさ、この大きな丸の中のこと全部やらないといけないけど、アヒルさんを１人で飼ってるわけじゃないじゃん。先生も入れて３９人で飼ってるからさ、うんちそうじが得意な人がうんちそうじ頑張って、おさんぽ好きな人がおさんぽ頑張ってっていうように、３９人それぞれの得意なこと合わせて大きな丸のアヒルを飼う資格ってことじゃダメなの？

Ｎさん：この大きな丸の中全部じゃなくて、できること１つでもいいと思う。

Ｄさん：うん、だめ！

Ｒさん：それもちょっとそうなんだけどさ、でもやっぱりうんちそうじ苦手でも１回はみんなやってみないといけないと思う。ちょっとでもいいから、挑戦。じゃないと本当の飼うにはならないと思う。

Ａさん：えっと、まだ自分はさ、まだアヒル触れないから。やるとしたら下のシート替えることくらいしかできない。

Ｓさん：あのさ、ミロのうんちはコロコロしてて丸いじゃん。でもアヒルのうんちはべちゃってしてて臭いじゃん。だから僕やれない。

Ｋさん：アヒルを飼うってことは、命を預かるってことだから、大切にさ、大事に飼いたいじゃん。だから命を預かるの中にうんちそうじもあるってわけ。

Ｈさん：生き物を飼うというのは心を育てるのと同じなの。赤ちゃん育てるのも同じです。だから大切にしなきゃいけないと思うよ。

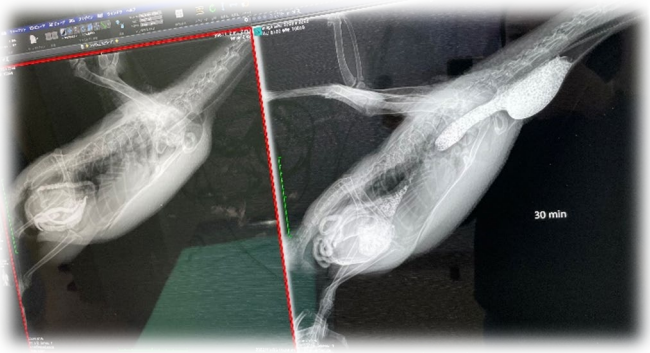
２年１組にとっての「アヒルを飼うってこと」とはどういうことだろうと、子どもたちと話しながら考えていました。アヒルを大切にしたいなと、毎日アヒルに話しかけ、触れ、一緒に遊び、その子なりに関わり続けてきたからこそ、語れる言葉です。子どもたちが命を預かるという責任や大切さを感じていること、自分にできることを一生懸命やろうとしていることを改めて感じることができた時間でした。また、嫌だなと思っていることを正直に話せる仲間、そんな自分と向き合える子どもたちが素敵だなと感じました。

～この話し合いから１ヵ月ほどが経ち、アヒルの名前が「ツムピー」に決まり、身体も大きく白くなった頃、事件が起きました。～

１１月４日金曜日、「先生、ツムピーがビニール手袋食べちゃった」と子どもたちが教えに来てくれました。うんち掃除のときに使うビニール手袋が風でツムピーの小屋へ飛んでいき、柵の隙間に引っかかったところを啄んで食べてしまったそうです。一番初めに見つけたＲさんは「取ろうとしたけど間に合わなかった」と泣きそうになりながら伝えてくれました。「どうすればいいの」「保健室に連れて行けばいいんじゃない」「大丈夫かな」と不安そ

うな顔でツムピーを見つめていました。そして、「これは、まあいいやって解決する話じゃないよ」「今度から気を付けようじゃなくて、もうこれからはツムピーが一生ビニールを飲み込まないように、みんなでビニール落ちてたら絶対拾おうって誓ってアヒルさんを飼うこと」「ツムピーが食べちゃったから、ツムピーがいけないんじゃなくて、僕たちが落としたんだし、僕たちが拾わなかったんだから、僕たちのせいでツムピーが危ないことになっちゃった」と自分たちの今までの生活を見直し始める子どもたち。「私たちのせいで危ないことになってしまったけど、今まで僕たち私たちのおかげでツムピーはしあわせにもなってると思うよ。今までたくさんツムピーのために動いてきたじゃん」と語る子もいました。

その日の夜、安曇野にあるリーフ動物病院でツムピーを診てもらうことができました。獣医さんには、ツムピーの体の中にビニール手袋が確認出来たら胃を切開して取り出すことと、胃を切開するための麻酔は鳥にとってリスクが大きく目を覚まさない可能性があることを教えていただきました。また、ビニール手袋を取り出さない選択をした場合、いつ消化管に詰まって急変するか分からないことも教えていただきました。どの選択をしてもツムピーの命にかかわることを実感し、怖くなりました。まずはおなかの中を調べようと、レントゲンを撮ったり、バリウム検査をしたりしてもらいましたが、結局ビニール手袋を確認することはできませんでした。胃を切開して確認する選択肢もありましたが、ツムピーの食欲や排便の調子がいい様子から、すぐに胃を切開する必要はないと診断を受けました。そのかわり、「アヒルは、わたしたち人間に痛いところや辛いことを隠す」こと、「食欲はあるか、うんちは出ているか、今まで以上によく観察し、食欲がなかったりうんちが出なくなったらすぐに病院に連れてくること」を教えていただきました。



月曜日の朝、「ツムピー生きてる？」「ツムピー大丈夫？」と真っ先にツムピーの小屋を覗きに来る子どもたち。病院で教えていただいたことを全て子どもたちに話しました。「怖い」「やだやだ！」と言いながらもツムピーのことをしっかり受け止めようと一生懸命話を聞いていました。

その日のスケッチブックには、「ツムピーがビニール袋を食べたけど、頑張って生きていたから僕もがんばりたいです」「ツムピーが生きてて嬉しかった。ツムピーと遊べて楽しかった」「今日はアヒルの健康チェックをしました。ビニール袋を飲み込んだからそれ用の健康チェックを作りました」「ツムピー、病院に行って怖かった？ツムピーえらいね。なんでつらいところを隠しちゃうの？」「うんちもしてるし食欲もあるのでたぶん元気だと信じてるけど、、、これからも健康でいてほしい」「これからもっと頑張っておせわするね。大好きだよ」「夜一人でお泊りするの怖かったね。治療がんばったね。これからは１組のみんなも気を付けるね」と、ツムピーへのたくさんの思いが書かれていました。

そして、この日１番驚いたことが、ツムピーのうんちを見て「うんちしてくれてありがとう」とつぶやく子どもの姿です。今まで毎日目にしていたツムピーのうんちが、「片付けなければならないうんち」から「健康を教えてくれるうんち」に変わったのではないかと思いました。「みんな、ツムピーが何回うんちしているか毎日数えようよ」という提案から、毎日うんちの数を数えることも決まりました。見方や行動が変わったのはツムピーのうんちだけではありません。餌となる野菜の切り方や、健康チェックカードの見直し、教室のゴミ拾いなど、ツムピーのために自分ができることを見直し、行動していく子どもたち。ツムピーが元気でいてくれること、一緒に過ごせる毎日は当たり前ではないこと、１日１日がかけがえのない大切な１日であることを改めて感じることができました。